

Exhibition Vol.38

Archive
vol.40

新鋭アーティスト発信プロジェクト

A-LAB Artist Gate '23

北村侑紀佳

齊藤あかね

陳琪

野村百合子

藤木菜々子

松田ハル

三木梨々花

A
LAB

Contents:

1	北村侑紀佳 / 倉庫
3	齊藤あかね / 廊下
5	陳琪 / 和室
7	野村百合子 / ROOM1
9	藤木菜々子 / エントランス
11	松田ハル / ROOM1
13	三木梨々花 / ROOM3
15	アーティスト・トーク
35	フライヤー・配布資料

新鋭アーティスト発信プロジェクト「A-LAB Artist Gate」とは…

本プロジェクトは今後の活躍が期待される若手アーティストによるグループ展。大学・専門学校を卒業か大学院を修了し、新たなステップに羽ばたこうとしている若手アーティストを紹介するプロジェクトです。



北村侑紀佳 Kitamura Yukika

滋賀県出身

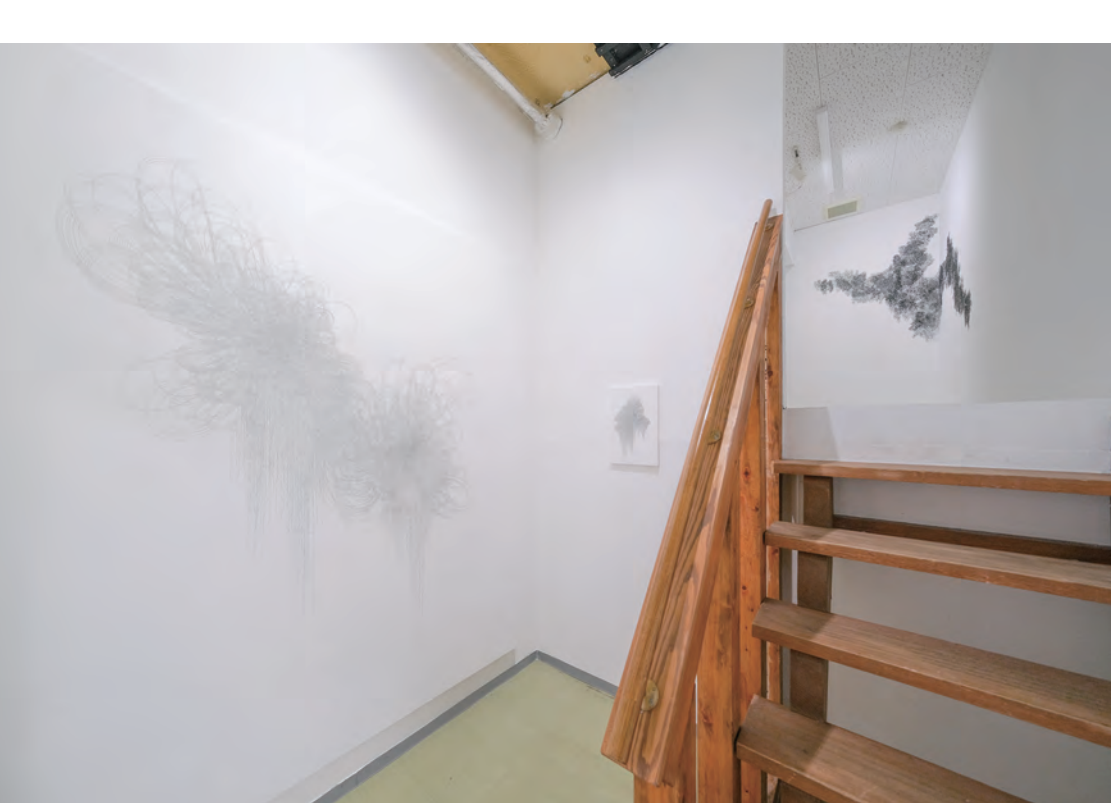
成安造形大学芸術学部美術領域洋画コース卒業

【近年の主な展覧会・受賞歴】

2022 明日をひらく絵画第40回上野の森美術館大賞展 入選

2022 箱の中の交差点/クマ財団ギャラリー/東京

2022 そこにいない誰かとの対話、或いは/成安造形大学ギャラリーキューブ/滋賀 など



- statement -

平面作品における主体者とはその作者を指すことが一般的であるが、私は線を執拗に緻密に描く、あるいは切り出すことによってその主体性を隠匿させる。しかし身体的な揺れは排除しきえず、近づくに見える線の掠れや歪みといった手仕事の痕跡によって作家という主体者が浮かび上がってくる。だが遠ざかると機械的に緻密なイメージによって主体性は再び隠匿される。

そうした鑑賞者の身体を介した鑑賞体験によって「主体者」の存在を問う。

《あなたがここにいてほしい》

パネル、モデリングペースト、パルプベース、ジェッツ、水性ペン、2273×1818mm（2023）

《理由は聞かないで》

パネル、パルプベース、ジェッツ、水性ペン、410×273mm（2022）

《目を瞑って話をしよう》

紙、サイズ可変（2023）



齊藤あかね Saito Akane

大阪府出身

成安造形大学芸術学部美術領域現代アートコース卒業

【近年の主な展覧会・受賞歴】

2023 成安造形大学卒業制作展2023 美術領域奨励賞

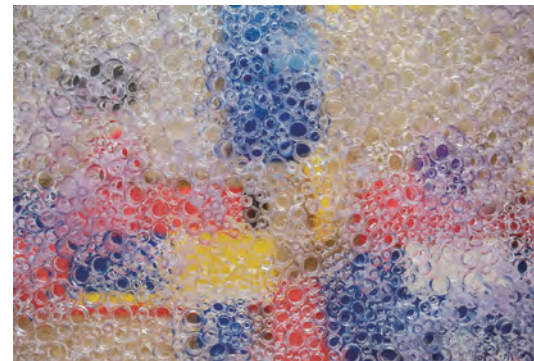
2022 AnyKobe with Arts/ROSE GARDEN/兵庫

2021 salad bowl/堀川御池ギャラリー/京都 など



齊藤 あかね

breathing-nursery school



《breathing-nursery school》*制作協力:西長洲保育所
透明ホース、アクリル板、ジェルメディウム、インクジェットプリント、サイズ可変 (2023)

- statement -

あなたにとって、いちばん遠い記憶はなんだろう。

何気なく覚えている小さい頃の出来事に、人生の見方や価値観、その人の生きていく基準が現れるとおもう。

いつかは想い入れのある人も土地も物も移り変わり、記憶の海に溶けて消えてしまうとわかっているからこそ、私の中で息をしていると肯定したい。



陳琪 Chen Qi

中国出身

京都精華大学芸術学部造形学科映像コース卒業

【近年の主な展覧会】

2022 生命の花/ギャラリーTerra-S/京都

2022 Marbling/京都精華大学/京都

2021 Garden展/京都精華大学/京都 など



- statement -

「色即是空」は仏教の「般若心経」に由来する言葉である。

この世にある一切の物質的なものは、そのまま「空」であるということ。

私にとって、「空」は水中の月の如く、鏡中の像の如く、夢や影の如く、響の如く、ゆく川の流れの無常の如く...

自分の表現する「空」の境地で、時間と空間を忘れ、瞑想し、穏やかになってほしい。

《空》

インクジェットプリント、マルチチャンネルビデオ、和紙、砂、水彩、植物、サイズ可変 (2023)



野村百合子 Nomura Yuriko

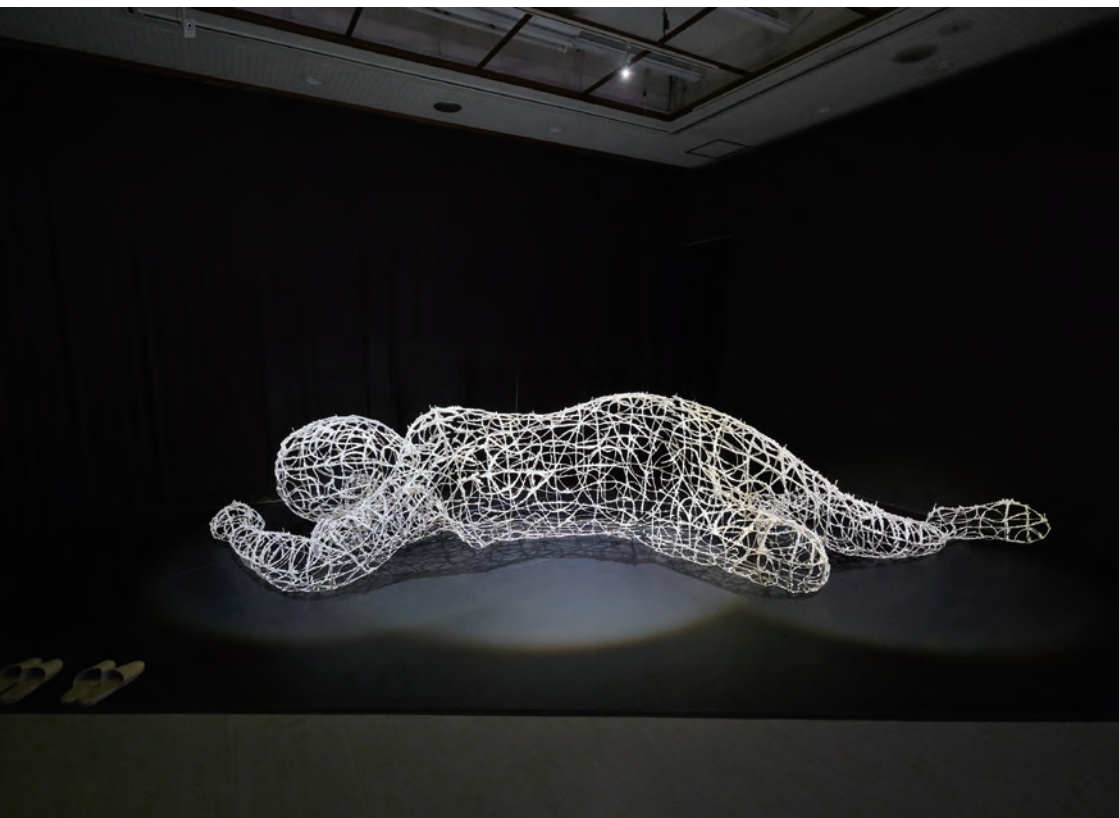
愛知県出身

京都精華大学芸術学部造形学科立体造形専攻卒業

【近年の主な展覧会】

2022 京都精華大学立体造形専攻3回生進級制作展/妙満寺/京都

2021 花まつり/ドラフトギャラリー/京都 など



《息、吐いて Blow Out》
ロウ、鉄、H1150×W5500×D1800mm (2023)

- statement -

温度などによる素材の変容を見せるパフォーマンスや立体作品の発表を主に行う。

近年は仏教における信仰の形に影響を受け、仏教の要素をモチーフとして取り入れながら、現代を生きる自身の葛藤や祈りを表現している。

悩みを抱えたときに海を見に行くように、他者の物語や歴史の深さを知ることが人の心の支えになっていると考え、

自身の芸術活動がその機能を果たすツールとなることを目指している。



藤木菜々子 Fujiki Nanako

大阪府出身

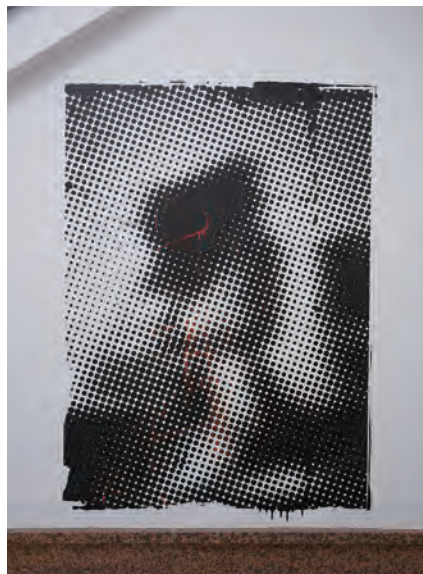
京都精華大学芸術学部造形学科版画専攻卒業

【近年の主な展覧会】

2023 キノプリント2023/ギャラリーヒルゲート/京都

2022 ART POINT Selection | 2022/GALLERY ART POINT/東京

2021 VISIONs I・II/GALLERY ART POINT/東京 など



- statement -

触れることは、対象を解りたいと強く憧れる行為だ。

他メディアを介在させながら転換、変換を繰り返してゆくプロセスが版画の魅力で、イメージに編集を重ねる行為は対象を理解したいと憧れているから。

目で触れながら、その詳細を追いかけるようにして画像を探る。

同じイメージを同一画面に繰り返し何度も刷り重ねることや、画像を拡大・縮小したり編集や加工を加えること、

それらの身体的な感触とは裏腹に、押し出されてゆくイメージは輪郭が曖昧になってゆく。解ろうとすればするほどわからない。

一番大きなパネルの組み作品は、私が解ろうとした痕跡を点字によって説明している。

その点字部分に積み重なったインクをまた削ってゆくことで、補填した情報も削ぎ落とされる。

私たちは一体何を見て、何を認識し、何を解りたくて何に触れているのだろうか。

《知覚と触覚を考える実践トレーニング》

シルクスクリーン、インクジェットプリント、アクリル樹脂、紙、サイズ可変（2023）



松田ハル Matsuda Haru

岩手県出身

京都芸術大学大学院グローバル・ゼミ修了

【近年の主な展覧会・受賞歴】

2022 CAF賞2022 入選

2022 CAF賞2022ファイナリスト展/代官山ヒルサイドテラス/東京

2022 東城信之介×松田ハル×リュウ・イカ_積層 | Layers/RICOH ART GALLERY/東京 など



《不死身のアンディ》

シングルチャンネルビデオ、4K、サイズ可変、20秒（2023）



《砂漠の絵画》

シングルチャンネルビデオ、4K、サイズ可変、5分26秒（2023）

- statement -

人間の技術や科学の進化は我々の想像力を拡張するかもしれない。その複製技術の歴史は絵画を複製するために生まれた版画から、印刷技術、写真や映像、インターネット、そして空間を複製するメディアであるVRが挙げられる。VRは現実の対となる仮想空間である。しかし、それはフィクションである。それはまるで私たちの目が複製されたようにそのデバイスは振る舞う。私たちの欲望が複製技術の発展を促進させた。しかし、その欲望が違う形となって現れるとき、欲望から生まれた暴力性を超え、生物としての普遍性に回帰するだろう。



三木梨々花 Miki Ririka

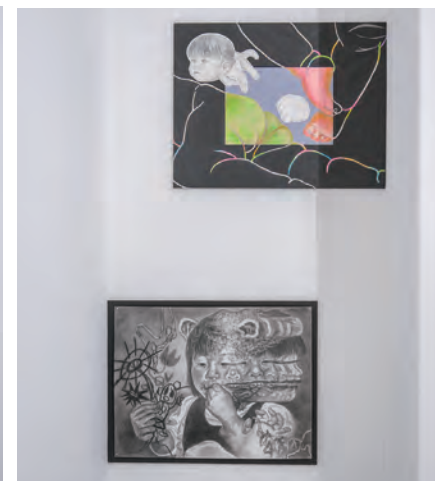
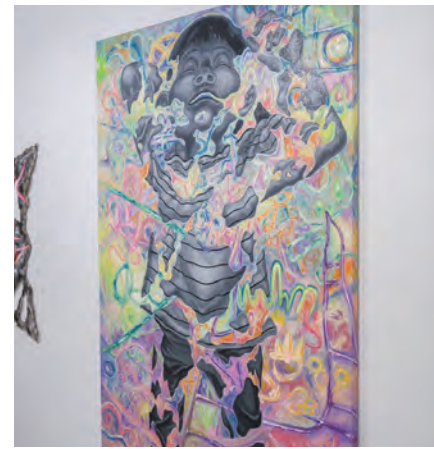
徳島県出身

京都精華大学芸術学部造形学科洋画専攻卒業

【近年の主な展覧会】

2022 生命の花/ギャラリーTerra-S/京都

2022 Dear mom/ドラフトギャラリー/京都 など



- statement -

大人が想像しやすい子どもの魅力と言えば可愛らしさ、癒しなどの印象を抱くことが多いだろう。しかし、実際の子どもは無意識に攻撃的な発言をしたり予想もしない行動をする無邪気さも持ち合わせている。逆に、この無邪気さこそが子どもならではの魅力ではないか。

《なんて無邪気な》

ベニヤ板、キャンバス布、段ボール、紙、フェルト、油彩、パステル、クレパス、木炭、チョーク、アクリル、サイズ可変 (2023)

出演 コーディネーター：おかげんた（芸人、アートプランナー、A-LAB アドバイザー）
北村侑紀佳、齊藤あかね、陳琪、野村百合子、松田ハル、三木梨々花
日時 令和5年6月11日（日）14時～16時
場所 A-LAB ROOM1



トークイベントの様子

大学生活・作品について

おかげんたさん（以下：おか） みなさんよろしくお願
いします。吉本興業の芸人でございます、おかげんたと
申します。A-LAB Artist Gate'23 ということでござ
いまして、毎年開催している展覧会です。大学とか大学
院を卒業、修了された方を、アドバイザーが推薦、そし
て公募が新たに今年から始まりました。公募で選ばれた
方も含めて今回は7名の作品を展示しております。新
しい作品であるとか、卒展のとき展示した作品を、こち
らで発表していただいております。それでは最初にアー
ティストの方々、お一人ずつにですね、どういう大学な
のかを皆さんに話をさせていただきたいと思います。北村
侑紀佳さんよろしくお願ひします。大学はどちらでござ
いますか？

北村侑紀佳さん（以下：北村） 成安造形大学を卒業し
まして、今は嵯峨美術大学に在籍しています。

おか 違う大学に進学ということですか？

北村 成安造形大学は、学部しかなくて大学院がないん
ですね。なので大学院に行くとなると、成安造形の人た
ちは他の大学に行くという感じになっています。

おか 大学の印象ってやっぱり違いますか？

北村 全然違いますね。やっぱり特色というか、色がか
なり違います。

おか それでは大学の紹介ですけども、こちらはどちら
でございますか？

北村 これは卒業制作をしているときの私のアトリエで



すね。ちょうど頑張って制作しているという時期で、あ
の正面と左に掛けられているものは卒業制作の作品です。

おか 大きな大作がありますよね。あれは完成までにど
のくらい日数がかかるんですか？

北村 これは今回も展示していて、倉庫の壁に掛けてい
る作品です。あれは夏頃から描き始めて、1月の卒業
制作までに間に合わせるようなスケジュールでした。私
の作品は結構時間がかかります。

おか なるほど。次の画像お願いできますか。これはギャ
ラリーですか？



北村 成安造形大学には学内のいろいろなところにギャ
ラリーがあって、その内の一つのギャラリーですね。

おか いろいろなギャラリーがあるってことですか？

北村 いろいろあります。なので学生の有志展だと、い
つもどこかしらで何か展示がやっている感じですね。

おか そんなに大学のギャラリーって展覧会が開催され
ているんですか？

北村 そうですね。成安は特にそこに力を入れている感
じではあるんですけど、学生有志の展覧会を企画して展
示することはかなりされていますね。

おか 自分の作品がギャラリーで展示されるのは嬉しい
ですよ。次の画像は制作しているアトリエですか？

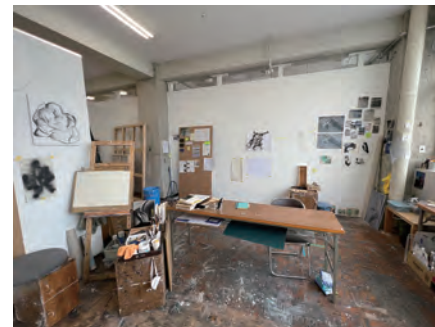
北村 そうですね。これは進学して在籍している嵯峨美
術大学のアトリエです。

おか さっきのアトリエの様子は、部屋の中で区切られ
ていたようですが、これはもっと広い感じがしますね。

北村 かなり広い場所をいただいて制作しています。

おか やっぱり院に行くという一人一人の制作場所
も広くなるんですか？

北村 個人的な意見ですけど、スペースも広がって使
い勝手の良い感じはします。



おか テーブルの上に載っているブルーのあれは何です
か？

北村 あれはノートで、結構私はメモをするので、アト
リエに置いてます。

おか どういうことを書きますか？

北村 それこそネタ帳ですね。タイトルとか思いついた
こととか。何かいろいろ見ていたりして、興味を持った
もの、例えばペットボトルがあったら、なんでこのフタ
は青いのかなんて。気になったらそれを書いたりして。
解決はしないようなこととかを結構書いています。

おか 解決はしないけども、それを書くことによって記
憶に留めることができる。

北村 そうですね。

おか ある種の日記帳みたいなものですね。

北村 そうですね。ほとんど日記みたいな感じで。

おか 学部の頃からあったものなんですか？

北村 もうずっとやっています。

おか すごい。まめですね。何冊目ですか？

北村 これはもう12冊目とかです。



おかげんたさん

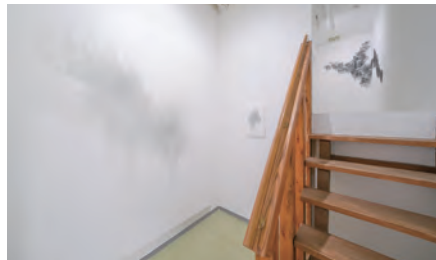
おか 12冊目。読み返すことがある？

北村 結構読み返しますね。

おか それがやっぱり自分の活力に繋がるというのか、このときに、こういうことを言っていたから、今度使ってみようかなと思ったりとか。

北村 そうです。新しいアイデアを考えるときは結構それを見返したりします。

おか 貴重ですね。それでは今回の作品に関して、お話を伺いたいと思います。どういった作品でしょうか？



北村 これは、入り口すぐにあるのがドローイングで、階段の上にあるのが切り絵の作品なんですけど。見てもらおうと分かるように、遠目で見てみると細かい機械的な仕事をしているように見えるんですけど、近くで見てもらうと、やっぱり私の手癖、線の震えとかが残っているんですね。鑑賞するときに近づいたり、遠くで見たりすることで、その見方が変わるということをテーマにして制作しています。

おか このドローイングは、細かな緻密な部分ですね。逆に上に展示しているちょっと立体的な作品は、また違ったアプローチで制作されているんですか？

北村 そうですね。



北村侑紀佳さん

おか この2作品を作るときの頭の中ってどうなってるんですか。どういう順番で制作されるんですか？

北村 切り絵はドローイングを元に切り出してるので、ドローイング、切り絵の順番なんですけど、制作自体は同時進行でやっている感じです。

おか それは気分転換も一つ入っている？

北村 そうかもしれないですね。

おか どう変化して今のコンセプトになったのか、後ほど聞かせていただけます。ありがとうございました。続いて齊藤さんお願いします。大学はどちらでしょうか？

齊藤あかねさん（以下：齊藤） 成安造形大学の現代アートコースを卒業しました。北村さんと同じ大学です。

おか 大学時代は顔見知りでしたか？

齊藤 そうですね。一緒に展示はよくしていたので、仲良くさせてもらっています。

おか 写真は、すごい雪ですね。

齊藤 成安は自然が豊かで、滋賀にある大学なんですけど、私は大阪に住んでいて。大阪で積もるような雪を見たのが、私の記憶では2、3回くらいしかなくて。



おか そうですね。降ってもちらほら降る程度ですからね。なかなか積もるということはないですね。

齊藤 だけど大学では毎年雪も降って積もっていて。

おか ということは、雪だ！と思って、思わず？

齊藤 綺麗で撮ってしまいました。

おか 寒さもどうですか？

齊藤 やっぱり寒いですね。真ん中の雪が積もっている所は、芝生があって、奥に行くと琵琶湖が見えたり、湖西線という京都から滋賀まで繋がっている電車も見えて一望できます。

おか 綺麗なところですね。この芝生では普段は皆さ

んどういうことをされているんですか？

齊藤 お昼の時間になったら、みんなここでゆっくり寝転んで昼食を食べたりしますね。

おか なるほど。次の画像をお願いします。



齊藤 これは私の大学時代のアトリエですが、すごい雑多な感じです。私の在籍していたコースが、部屋ですと制作するというより、違う施設、鉄を加工する場所とか木材を切断するようなラボという場所があったんですけど、そこを自分の居場所にして欲しいということで、私のコースの中では、自分の制作場所がある学生というのは少なかったんです。

おか いろんなものが置いていますね。

齊藤 そうですね。私の向かいに机があるんですけど、その友達の実物だったり、みんなそれぞれがいろいろなものを集めてきて。2年生の間はまだ綺麗な教室だったんですけど、4年生の最後になるとこんな様子で。

おか 日々ものが増えていく？

齊藤 そうです。

おか 次の画像は？



齊藤 これは、私が3年生の終わりぐらいに制作していた作品です。この場所が造形ラボと言われている、木を

切断するような作業を行う部屋です。成安の特徴で大学が開いている時間が長くて、よく言われるんですよ。

おか 大学が開いている時間が長いということは、夜遅くまで出入りができるということですか？

齊藤 そうです。

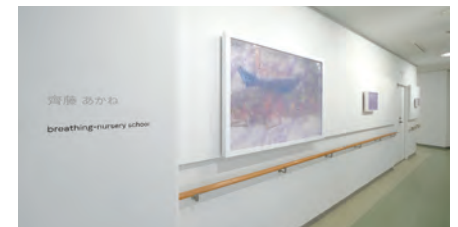
おか 何時くらいまで？

齊藤 22時まで入れていました。この作品を制作したのが、本当にギリギリで。撮影した時間が23時とかなんですよ。

おか あかながな、帰らな。

齊藤 そうです。でも警備員さんも優しいので、ギリギリまでいいよって言ってくれて。

おか 優しいですね。続いての画像は作品ですね。齊藤さんの作品は、廊下に展示しています。作品のご説明をお願いします。



齊藤 A-LABの1階に、西長洲保育所という保育所がありまして。先生方にご協力いただいて、制作した作品です。私自身、地域とか人の記憶にすごく興味があります。過去は過ぎ去ってなくなってしまうものというよりは、今も私の中で生きていていると思っているんです。それは人自身もそうだし、土地自体もそうだと思います。



齊藤あかねさん

なので、この保育所も過去から現在、現在から未来に繋いでいくように「呼吸をしている」ということで、透明ホースを貼りつけて作った作品になります。寄りで見ると、たくさん連なった透明ホースが、泡に見えたり、臓器みたいに見えたりもして、面白いなと思います。

おか なぜ透明なホースをこのような形で作品に取り入れることになったのかは、後々分かることだと思いますが、作品に対して非常に興味が湧いてきました。

齊藤 ありがとうございます。

おか ありがとうございます。それでは続いて陳琪さんです。よろしくをお願いします。陳琪さんはご出身が？

陳琪さん（以下：陳） 中国です。

おか 日本にはどれぐらいいらっしゃるんですか？

陳 今年は4年目です。

おか 4年でこれだけ喋られるんですよ。すごい勉強家ですね。大学はどちらですか？

陳 京都精華大学の映像コースを卒業しました。

おか 画像は、こちらも雪ですね。すごい。



陳 私も雪ですね。右は、精華大学の代表的な場所です。左は昨年出来た明窓館という新しい建物のテラスからの景色です。

おか 続いての画像は？

陳 誰かが学校のあちこちで作った雪だるまです。

おか 真ん中の上はカオナシですかね。

陳 そうですね。

おか 千と千尋の神隠しに出てくるキャラクターですよ。右もアニメのキャラクターみたいですね。真ん中の下の写真は、トイレを作っているんですよ。

陳 はい。



おか それに寄り添って雪だるまが横にいるというのが何とも言えない雰囲気ですけど、あの左上も人生に疲れたような感じでもたれているような。その辺りがやっぱり面白いですよ。みんなそれぞれ、立体作品として捉えているのか、一つの作品みたいで面白いです。続いての画像は？



陳 これは、今在籍している京都市立芸術大学の写真演習の授業風景です。

おか 右は、何か部屋に写っていますよね。

陳 はい。実際にはこの部屋は先生がこの窓に一つの小さな穴を空けて、それ以外をカーテンを閉めて遮光することで、この部屋はカメラの中に变身しました。私たちはカメラの中にいるような状態で、外の景色はこの穴を通して、ホワイトボードに映っています。

おか 凝ってますねー、そういう意味で言うと、この画像一つ撮るだけでも面白いですね。

陳 はい。

おか やっぱり大学院に行くとか授業の内容も変わってくるわけですね。続いての画像は。

陳 これは作品です。



おか これは今回 A-LAB で展示している作品ですね。

陳 そうです。

おか それでは作品についてお願いします。

陳 この作品は、和室の空間で卒業制作の作品「空」をさらに展開したような作品で、仏教の世界の話です。畳の入っていた場所には砂を敷いて、枯山水のように模様がついています。でも川の流れる映像が投影されているのでよく見ないと分かりません。

おか 和室の部屋は選んだのか提案があったのか、どちらだったんですか？

陳 希望しました。

おか 和室で今まで展示したことは？

陳 ないです。これが初めてです。

おか チャレンジしてどうでしたか？

陳 すごく良い経験になりました。

おか 中国の家と日本の和室は全く違いますよね。

陳 違いますね。また障子にも川の映像が投影されていて、この全ての空間は、仏教の説話をベースに構成しています。

おか 全て空の一つの流れになっているわけですね。

陳 そうです。それぞれ展示しているものは、全て「自分」



陳琪さん

という意味があります。

おか 勉強になりますね。ありがとうございました。それでは続いて野村さん。お願いします。

野村百合子さん（以下：野村） 京都精華大学の立体造形コースを卒業しました。

おか 立体造形コースというところがあるんですね。

野村 立体造形コースは、主に彫刻を扱う領域のコースですね。

おか なのに画像がうどん。



野村 食べている途中の写真ですね。

おか これはどこで食べているんですか？

野村 これは食堂でよく食べる山菜うどんです。

おか 山菜うどん。

野村 はい、大好きで。毎日昼と夜の食事は食堂で済ませていたんですけど、6〜7割ぐらいは、山菜うどんか山菜そばを食べていました。

おか それは、麺類が好きということなんですか？

野村 精華大学の食堂は、麺類が圧倒的に安くて。かつ、何か野菜もちょっと摂りたいということで。

おか なるほど。続いての画像は、制作風景ですか？

野村 卒業制作展間際の仕上げの段階の様子ですね。

おか これが今回展示されていますよね。

野村 そうですね。卒業制作展と構造は全く同じ作品ではあるんですけど、ろうそくの蠟を最後に仕上げで掛けるんですが、運搬のときにある程度落ちてしまうので、再制作でここでもた掛け直して、展示をしています。



おか 精華大学の卒展でも拝見したんですけど、その時よりも蠟の量が多いような気がします？

野村 頑張っ掛けてたら、分厚くなりました。今回の方がバワフルな感じになっています。

おか それこそ、その時は背景が白ですけど、今回は黒の世界で、また引き立つ部分がありますよね。

野村 そうなんです。

おか 続いての画像です。これは展示が終わったのか、制作が終わったのか、どういう状態ですか？



野村 これは、もう卒業制作展が終わって、大学に置かせてもらっているときの状況ですね。

おか 本当に作品が休んでいるような感じですね。



野村百合子さん

野村 はい。陰で寝ているという感じですね。

おか 制作も大変だったんじゃないですか？

野村 大変でした。

おか 制作中、何かで苦労ありましたか？

野村 そうですね。1 個作るのに時間が掛かるというのもそうですけど、私は絵を描くのがすごく苦手なので、そもそも人体を綺麗に作るということの難易度が高くて。頭が大きいからちょっと小さくしようと思って、いったん作ったものを全部壊したりとか、そういうことを繰り返して最終的に綺麗なバランスに持ってくるころまでが結構大変でした。

おか 完成するまでに試行錯誤がその中であるわけですね。ちなみにこれで制作日数はどれぐらいにかかっているんですか？

野村 構造を鉄の線で作っているんですけど、鉄の線を溶接しきるまでに、大体、2 ヶ月強かかっています。

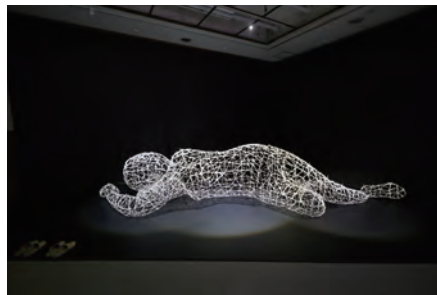
おか 2 ヶ月強。さらに蠟を掛ける作業も入ると3 ヶ月とか？

野村 もっとかかっているかもしれないです。ちょっとあまり覚えてないですね。

おか コンピュータグラフィックみたいに見えますよね。背景が黒なので余計に。

野村 そうですね。何か3Dの中にいるような感じです。

おか それが今回展示している作品ということになるんですけど、この作品に関してお話をお願いします。



野村 自分自身が涅槃のポーズをとっている作品ですけど、少しお話ししましたが構造を鉄線で作って、最終的に蠟を掛けて仕上げています。涅槃は仏教で完全に悟りを開き切って、輪廻のループから解脱した状態のこ

とを指すのですが、大学卒業というところで、自分も学生のサイクルから終わりを迎えるということで、涅槃と卒業がかなりリンクしたような感じがしまして、卒業制作展で涅槃を作ろうと決めました。

おか タイミングが良かったですね。

野村 すごくタイミング良かったです。

おか 私も会場に訪れたときに足元から見たり、頭の方から見たり、引いて見ていると、本当にいろいろなことを考えるというか、想像しますよね。涅槃、仏教が何故作品のコンセプトに結びついて出来上がっていったのか、非常に興味があります。野村さんでした。

野村 ありがとうございます。

おか ありがとうございます。それでは松田さんお願いします。

松田ハルさん（以下：松田） よろしくお願います。

おか 男性一人ですけど、周りもやっぱり女性が多いですか？

松田 多いですね、美大はやっぱり特に。学部の際は100 人くらいいて、男が18 人しかいなかったです。

おか どんな感じになるんですか？

松田 男たちが結束してみんな友達みたいな感じでしたね。

おか 結束力が高くなるんですね。大学は？

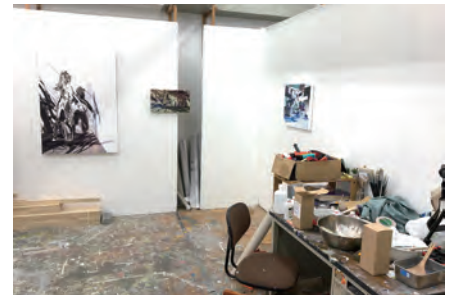
松田 京都芸術大学の大学院で、グローバルゼミを修了しました。これは、卒業制作の時の様子で、今回展示している作品とは全然違うんですけど、藤木さんと同じように版画を制作している様子です。



おか これは、赤のインクを垂らしている状態ですか？

松田 そうですね。

おか 何色ぐらい使っているんですか？



松田 僕は4 色刷りの写真製版と言われるやり方で、プリンターの技術を手で刷っているという感じですね。

おか 雑誌の写真を切り抜いたような雰囲気の良い写真ですね。続いての画像をお願いします。

松田 これは大学のアトリエで、自分の作品を撮っているもので、机がめちゃくちゃ汚いんですけど。絵の具だったりとか、版画の材料があったりします。ここでは絵を描いたり、制作のことを考えたりしていますね。またここは別に、版画を刷ったり、洗ったりするスペースがあります。

おか 続いては？



松田 修了制作展の準備をしているときですね。アトリエ兼展示スペースとしてさっきの場所より全然広いスペースを1 ヶ月とか借りて、ここで制作をしてそのまま展示をしました。

おか 設営も楽ですね。

松田 そうですね。運ぶ必要がないので。

おか これすごく大きな作品ですね。

松田 でかいです。横が3m45cm とかあるのかな。

おか これは、素材は何を使っているんですか？

松田 絵画と一緒に木枠に布を張って、キャンパスを作って、その上に最初の画像みたいにシルクスクリーンで刷った後に絵を描いたりしています。

おか 支持体はキャンパスなんですね。

松田 はい、そうです。

おか これだけ大きな作品を制作することは、今まで機会はなかったんですか？

松田 そうですね、全くなくて。今までで一番大きな作品です。

おか 続いている画像は今回の作品ですね。こういった作品でしうか？



松田 両方新作ですけど、奥に大きく展示している方は、5分間くらいで、段々とループしていくんです。光が回転してループして、だんだん速くなっていくんですけど、それと同時にイメージ、その自画複製みたいなところで反復することを大事にしている。絵画の歴史を今回参照しているんですけど、それを言葉にして段々と加速させていくような作品です。

おか モニターの作品の方は？

松田 これはアンディ・ウォーホルのためにちょっと作りたいと思って。オマージュですね。



松田ハルさん

おか アンディ・ウォーホルがお好きなんですね。

松田 好きですね、自分が版画を始めるきっかけというか、影響を受けている人物なので。

おか いろいろな手法もそうですが、ポップアートにも影響を受けているところもありますか？

松田 そうですね。

おか 画面中央にいるのは人ですかね？持っているものは何でしょう？

松田 もう一方の映像にも使っているんですけど、彫刻が絵を持っています。でもその絵の中のイメージが何も描かれていない。ただ、その中の光とかが2つの作品とも全部変化するんです。アンディ・ウォーホルは撃たれたことがあるんですね。

おか そうですね。

松田 それで「死」とかをテーマにしている作家で、すごく恐れていたみたいなのがあって。資本主義を考えるにあたって、何かオマージュ作品を作りたいと思って制作しました。

おか 映像の下には文章もあるということで、これで一体化させているということですか？

松田 そうですね。音もあるんですが、時間経過で光が全部違って。回転していくんですね。

おか ありがとうございます。

松田 ありがとうございます。

おか 最後に三木さんお願いします。

三木 梨々花さん（以下：三木） 三木梨々花です。よろしくお願いします。

おか 大学はどちらでしょうか。

三木 精華大学の洋画コースです。



おか これは制作しているアトリエですか？

三木 アトリエです。学部時代のアトリエですけど、いつも散らかってしまっています。

おか 壁にドローイングがありますが、これは三木さんのものですか？

三木 全部そうです。壁一面にズラッと。窓にまで貼るときもあります。

おか 他の方も皆さん貼られるものなんですか？

三木 あまり見ないですね。皆、スケッチブックとかに。1枚1枚作品には直結しないエスキースですけど。

おか 全然接点がないということですか？

三木 そうです。でもたくさん描いて、全部貼り合わせて一度に見ることで、作品に繋がっていくんです。

おか ということは、このドローイングの作品は、それ自体を作品ではなく、参考のものということですか？

三木 そうですね。エスキースを並べて見ながら、プロセスを考えていくという方法でいつも制作しています。

おか 次の画像をお願いできますか？

三木 こちらが卒業制作展にも出していた《Dream my stage》という作品の制作風景です。



おか 完成した状態と見比べるとすごく描き込んでいることが分かりますね。

三木 そうですね。描き込み過ぎてかなりホラーな印象になってしまいました。

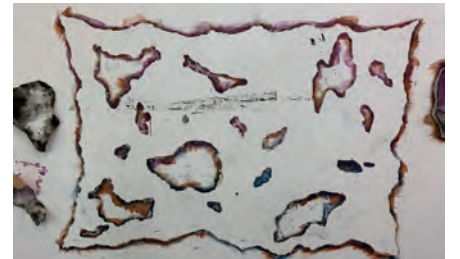
おか 私たちが拝見する時はどれだけ描かれているのか

は分からないですからね。ドローイングもたくさんありますね。

三木 左右のドローイングを見ながら制作しています。

おか 続いている画像をお願いします。

三木 今回 A-LAB で展示する新作を制作している最中に、たまたま壁についてしまった絵具の痕跡です。



おか 作品ではなくて痕跡なんですね。卒業してもこのまま置いているんですか？

三木 それは先生に怒られるので、消していますね。真っ白な壁に復旧しています。

おか 壁からこれが現れたときは新鮮だったんじゃないですか？

三木 そうですね。ここに貼っていた作品は失敗作なので、もう折り畳んで置いてあるんですけど。

おか 失敗作ですか。

三木 失敗作だったんですよ。今展示しているのは成功作ですけど、その前の失敗作が、こちらの跡です。

おか 続いています。これは？



三木 別の作品の下地を作っている最中に、我慢できなくて描いてしまったものです。

おか これを壁に直接？

三木 壁に直接描いています。

おか 制作中の気分転換という意味では重要なことかもしれないですね。

三木 そうですね。次の作品のアイデアに繋がったりもします。

おか ちなみにこれは次の作品へ繋がりましたか？

三木 まだ繋がっていないですね。もしかすると、黒板の作品に雰囲気似ているので、そちらの作品で繋がってくるかもしれないですね。

おか なるほど。こちらが今回展示している風景ですね。



三木 子どもというモチーフは定めているんですけど、内容や画風だったり、その時の作品のコンセプトことによって変えて制作しています。今回の展示ではそれらを構成して展示しています。少年同士が喧嘩する場面だったり、日常をテーマに子どもが食事をするようなシーンを描いたクロッキーの作品だったり。

おか そういう子どもたちの様子は観察するんですか？

三木 そうですね。休日にショッピングモールに訪れた際に、気になった子どもの様子をメモ帳に残しています。

おか 子どもって面白いですよ。食べた後の歯形見たりしませんか？あれは何で見るとしうね？

三木 ありますね。

おか すっと無心の様子で食べながら歯形を見ていたりしますよね。すっと不思議に思っているんですよ。そういうことが作品になっていくということですか？

三木 はい。

おか 何を使ってお描きになっていますか？

三木 パステル、木炭、油彩、クレヨン、チョーク、アクリルなどいろいろ使っています。

おか なるほど。描かれている子どものモデルはいるん

ですか？

三木 男の子以外は全部私の幼少期をモデルにしていますね。

おか 男の子以外？

三木 はい。というのも理由がありまして、やっぱり私の作風は、ちょっとグロテスクに思う人が多いんです。

おか はい。

三木 それで例えばお子さんをお持ちの方にちょっとモデルにさせていただきませんかとお願ひしても、断られることがありまして。なので自分をモデルにするしかない。

おか なるほど。黒板画の一枚は、ガリバー旅行記のようですね。

三木 そうです。ガリバー旅行記のリリパット王国という、小人の国のお話をオマージュした作品です。

おか これはなぜこういう題材を選んだんですか？

三木 ガリバー旅行記の第1編のリリパット王国に流れ着くところで、ガリバーが疲れて眠ってしまうんですね。卒業制作の作品が「夢」という題材だったので、睡眠を黒板画で表現したかったんです。なので、ガリバーが砂浜で疲れて寝ているシーンと、睡眠を掛け合わせたような形です。

おか これは描いている楽しさが伝わってくる作品ですね。描いていて楽しかったですか？

三木 「最後の最後」が一番楽しかったです。

おか どういうことですか？

三木 描いている途中は、やっぱりいろいろな方から、「三木さんの作品はちょっと怖いから、可愛くしよう。」と言われることが多かったんです。我慢しながら可愛く



三木梨々花さん

描いていたんですが、卒展の4日前に爆発してしまひまして。全部壊したんです。

おか これを？壊したってどういうことですか？

三木 元々顔に穴も開いていませんでしたし、消えなかった怖い雰囲気ではなかったんですけど、きちんと綺麗に描いてあるシーンを全部崩したりして。

おか その過程を経て三木さんらしさというのが、作品に出てきたということですよ。

三木 そうですね。こっちに正解でした。

ターニングポイント

おか ありがとうございます。みなさんの大学での過ごし方や雰囲気、それぞれの制作のコンセプトがお分かりいただけたかと思ひます。今の制作スタイルに結びつくきっかけ、いわゆるターニングポイント。そのターニングポイントをお聞きしながらですね、どうやって作品を制作していくのか、お話を伺ってみたいと思ひます。北村さんよろしくお願ひします。ターニングポイントは何でしょうか？

北村 「物理学」です。

おか 物理学。全く見当つかないですね。

北村 そうですよ。

おか これは、どういったことでしょうか？

北村 美術って、とても主観的な仕事というか、特に私の場合は細かい仕事をずっと一人でやっているので、自分の中で堂々巡りになってしまうことが結構あるんですね。学部の時とかは結構それで悩んでしまひて、美術以外で私がやりたいこと、できることを考えた時に物理学だったんですね。

おか 物理学の部分から何が得られたものがあるわけですか？

北村 そうですね。物理学って大雑把に言うとも、目に見えないけど、そこにあるものを捉えることができる学問なんです。私はずっとそういうことを表現したいと思ひていたので、物理学を客観的な視点として、制作に取り入れるようになりました。例えば、今回展示しているドローイングだと、天体が動く軌道の動きを何枚か重ねて、

その輪郭を辿ったりして形を割り出して制作しているんですね。

おか そんなことをしてるんですか。

北村 そうなんです。実は結構理系の仕事をしていて。

おか それは何年生のときにそういうことを思いついたんですか？

北村 そうですね、3年ぐらいのときには、そういうものに興味があるって気付いたんで、そこからですね。

おか 物理学の影響を受けた人とかいるわけですか。

北村 いっぱいいいます。ただ、その物理学という学問も幅広くて、それこそ宇宙のことをやっている人もいれば、量子という目に見えないようなことをやっている人とかもいっぱいいるので、そういう様々な分野からいろいろなことを吸収して制作に取り入れている感じですよ。

おか 物理学の面白さって何ですか？

北村 物理学ってさっきも言ったように、目に見えないけどそこにあるものを、ずっと研究しているような学問で、例えばこういう机一つにしても、私達の肉眼で見るとようにしか見えないけど、顕微鏡とかで見るとすごい粒の集合だったり。そういうのがすごく面白いと思ひていて、作品に取り入れて作っている感じですよ。

おか 例えば顕微鏡とか、ミクロの世界ですよ。

北村 そうですね。

おか 子どもの頃からそういうことに興味を持っていたんですか？

北村 望遠鏡とかがすごく好きでしたね。図鑑とかもよく見ていました。全然意味は理解してなかったですけど、数学の本とかも見ていましたし、いろいろなものを見ていましたね。



おか 中学の授業でも、物理ってあるじゃないですか。

北村 ありますね。

おか 好きでした？

北村 中学の物理は嫌いでした。難しくて。

おか でも物理が制作に影響を与えるようになったんですね。

北村 自分の中でずっと絵を制作していると、何が正しいか分からなくなっていくんですね。

おか 正解がないですもんね。

北村 その時に、物理学の客観的な視点があると、集中することができるので、そこから制作に取り入れるようになりました。

おか 客観的に見ることができます？

北村 そうですね。

おか 作品を制作しながら自分自身も一旦そこで立ち止まって考えることができますよね。

北村 そうですね。作品との距離が近くなり過ぎると、どうすればいいのかわからなくなってしまうので。

おか 距離が近過ぎると、迷宮に入ってしまう部分があるんですね。それで客観的に見るためには、物理学が必要だと。

北村 そうですね。

おか 物理学をもう一回、大学で勉強したいとかは思わないですか？

北村 今もいろいろな物理学に詳しい人とかにお話を伺ったりはしています。ただ難しいので、自分が分かる範囲にはなるんですけど。

おか 物理学がこの作品に取り入れられていることを、物理学の先生とかが見たら、喜びそうですね。北村さんでした。ありがとうございました。それでは齊藤さんのターニングポイントを教えてください。

齊藤 私は「保育園」です。西長洲保育所の話も出ましたが、ターニングポイントは2年前です。

おか 何がありましたか？

齊藤 私の通っていた保育園が無くなりました。

おか 寂しいですね。それは制作とどういった結びつきがあるんでしょうか？

齊藤 私が美術が一番楽しいなと思えたのが保育園の頃

で、音楽も好きだったんです。元々はピアノの先生になりたいなと思っていたんですけど、そのきっかけをくれたのも保育園で。生まれて一番最初に社会と結び付く場所って保育園じゃないですか。

おか 保育園の頃の記憶ってありますか？

齊藤 覚えていますね。

おか どんな子でしたか？

齊藤 私は、ずっと絵を描いていました。

おか そこで学んだことがあるわけですか？

齊藤 そうですね。そこから制作することって自分の疑問に思ったこととか、悲しいなって思ったことを肯定するために制作しているような気持ちでいますね。

おか ネガティブなものをポジティブに転換していくということですか？

齊藤 そうです。保育園が無くなっても、今も私は生きているということで、透明ホースを使った作品にたどり着いたんです。透明ホースの用途が、医療器具であるとか、水槽に水を流したり、空気を送るのも透明ホースを使うことが多いです。なので、透明ホース自体が「呼吸」という意味合いに結びつくような気がしています。

おか なるほど。透明ホースが呼吸を連想すると。

齊藤 ちょうどその頃コロナ禍で、息がしづらい時代ということから、そういう時代性も含めながら使っていました。

おか そういう意味で2年前ですか。

齊藤 そうです。

おか そこに辿り着くまで、紆余曲折あったんじゃないですか？

齊藤 やっぱ悲しいことがあると主観的な気持ちで



ずっと制作をしてしまっ。続けていくと、悲しい気持ちになってくるんですね。

おか ポジティブに転換していかないといけないのに？

齊藤 ネガティブな方向に行ってしまうという矛盾が生まれたりして苦労しました。

おか 保育園からそう繋がっていくというのは、聞いてみないと分からなかったですね。

齊藤 そうですね。

おか でも確かにその通りです。現代に結びついている作品ですね。そして今回もこの保育園というのは、このA-LABの下が保育所ということもあって、現在進行形と言いますか。

齊藤 何か全てが繋がったような展示に今回なったなと思って、私の中ですごい感慨深いです。

おか 合点したわけですね。ありがとうございます。齊藤さんでした。次は陳琪さん、よろしくをお願いします。ターニングポイントを教えてください。

陳 「孤独」です。

おか すごく明るいじゃないですか。

陳 この作品を作った後は明るくなってきました。

おか 制作中は孤独だったということですか？

陳 そうです。

おか 大学に行く前は、制作はしていたんですか？

陳 大学に入る前は全然アートに関係ない仕事をしていました。

おか なぜ制作に目覚めたんですか？

陳 多分、その時の辛い生活から抜け出したいと。

おか アートで自分を変えたいとか？

陳 そうです。アートで自分を癒したいと。

おか この孤独というのは、アートに興味は湧く前の話ということですか。それとも制作している途中？

陳 どちらでもあります。繋がっています。

おか 制作をしているときに孤独を感じるというのは、怖さなのか、寂しさなのか。

陳 寂しさですね。コロナの影響で、ずっとオンライン授業をやっていました。みんなと顔を合わせることもなかったし、話もできなかったので、ずっと独りで作品を制作していた感じでした。

おか その孤独から今の作品のコンセプトに行き着いたのは、どういった流れだったんですか？

陳 孤独な時は、本を読みました。その本は、ヘルマン・ヘッセというドイツの作家の『シッダールタ』という本です。

おか その本を読んで、何を感じたんですか？

陳 釈迦は独りで旅をするとき、川に辿り着いてから悟りがあって、仏土になりました、というお話があります。自分も川を側でずっと見ていて、何ができるかなと思って、この作品を作りました。

おか その本を読んだのはどれぐらい前の話ですか？

陳 1年前の話です。

おか その前はどんな作品を作っていたんですか？

陳 同じテーマで写真の作品を作っていました。その時の作品は、自分の悩みを表現していました。

おか 作品を制作して、いわゆる悟りと呼ばれる形、その意味合いに辿り着きましたか？

陳 多分、ちょっとだけ。

おか 今現在も制作しているということで、今回展示している作品も、やはり「空」というものがテーマということですよね。ありがとうございます。修行でもそうですけども、孤独なものです。自分自身と向き合うという、そういう世界。周りのものが見えなくなるという。虫の声も聞こえなくなって、何もなくなる。私も実は、あるところでずっと座ったことがあるんです。夜中に6時間ぐらい座ったかな。ずっと座っていると、周りが自然に囲まれたお寺でしたから、最初は虫の声とか、邪念がいっぱい聞こえてくるんですよ。例えばテレビのCMとか歌とかがずっと頭の中で流れてくるんですけど、5時間ぐらい経つと全く何も聞こえなくなるんですね。それに不思議なことに、あと何時間でも座っていられる気持ちになるんですよ。それが「空」に近づいたということなのかどうなのかは分かりませんが。そういうことがやっぱりあるのかなと、ふとお話を聞きながら思い出しました。続いては野村さん、お願いします。「就活」。

野村 はい。

おか これは最近の話ですね。

野村 そうですね。

人生のターニングポイントはすごく多かったので、今回の作品についてのターニングポイントです。私は就活を始めるのが遅くて、4年生の春から秋にかけて就活をしていました。美術系の大学に行っていると、まず就活をするかしないかという選択があると思うんですけど。

おか はい。

野村 私は就活をすることは決めていて、クリエイティブ職じゃない一般的な、総合職みたいなところを目指そうと思っていました。だから美術大学じゃない、一般大学の人達と一緒にスタンダードな就活をしたことがすごく大きな経験でした。

おか アートには携わらずにということですか？

野村 そうです。

おか 周りから、なぜ？って言われなかったですか？

野村 言われましたし、大学院に行くと思われていたらしくて、就活することに結構驚かれました。

おか その就活を始める時期が遅かったのは、迷っていた部分もあったんですか？

野村 割りと周りもそんなに焦っていなかったんで、流されるままに。別に遅いという気はしていなかったんですけど、一般的に見ると遅いという感じですね。

おか どうなっていきましたか？

野村 スーツを着たりとか、やっぱり新卒就活のセオリーって割りと無難にやるという感じなんです。個性を出さないという傾向が強くて。それが結構苦しくて、その煩惱とかって自分らしさに繋がっていると思うんですけど、それを抑えていくことは、自分が死に向いているような気がして。機械的になっていくというか、自分じゃない、自分らしくないような。

おか 自分を殺していくような？

野村 そうですね。生きている実感が湧かなくなっていた時期がありまして。就活自体は未来に向かう行為なのに、死に向かっているような感じがして自分の中で、矛盾がすごくありました。生きていくための就活なのに、その行為自体は死にダイレクトに結びついているような感じで、自分らしさを抑え過ぎると自分が死んでしまうけど、就活的な正解は抑えていくことであるというのが。

おか 言うなれば会社の方向性と合っているかどうかと

いうことで、合わせていくということもありますよね。

野村 企業によって就活のやり方は多少違うと思いますけど、一般的なセオリーとしてはやっぱりそういうことなんですよ。

おか 何社くらい受けましたか？

野村 数えてないんですけど、20 前後は受けたと思います。端的に説明できないんですけど、その生きるための行為が実は死に向かっているところが凄く葛藤に繋がっていて。それが涅槃の業を積んで煩惱を取りきることが、実は輪廻のサイクル、本当の死という意味であるということが、リンクしていたんですね。

おか でも、そこに辿り着くまでに、インターバルもありますよね。

野村 そうですね。

おか 何か本を読んだりとか、誰かの言葉に影響を受けたとかはなかったですか？

野村 受けているかもしれないですけど、認知はしていないですね。

おか ということは、スーツと降りてきた感じですか？

野村 作品を作るときもそうですね、降りてくるイメージがあります。

おか 実際この涅槃の作品ができたとき、どう思いましたか？

野村 その辛かったエネルギーが、かなり良い意味に出ているなというのは感じますね。今まで自分のエピソードを作品に落とし込むということができていなかったんで。初めて自分のオリジナルの作品が作れたなと。

おか 卒業に間に合って良かったですね。

野村 良かったです。

おか ありがとうございます、野村さんでした。続いて松田さん、よろしく願います。ターニングポイント、教えていただけますか？

松田 「版」にしました。というのは、学部の際は美術大学とかでは元々なくて、筑波大学の中の芸術専門学群という、教育大の中に美術大学があるような形でした。最初、1・2年生の時は油絵を学んでいてペインティングをしていたんですけど、そこで学んでいる大学の教育と、現代アートにズレみたいなのを感じて。自分は現

代アートがやりたいけど、ペインティングが自分の表現方法としてベストなのかというそうではなくて。大学3年で専攻を選ぶんですけど、そこで版画を選択したんですね。そこで学んでいて不思議だと思ったのが、人間が生み出してきた複製技術を、なぜアートという枠組みで学ぶのかということを知りながら思っていたんですね。例えば、木版画だったら浮世絵とか。その当時、浮世絵は彫り師、摺師がいて、ポスターのように何枚も複製されて。銅版画や他の版画の技法もそうですけど、基本的には人がより一般的にかつ大量に多くのイメージを皆に知って欲しいみたいなことも含めてやっているけど、何でこれを美術の大学の中で学んでいるのか、何か分かんないなってなったときにいろいろ考え始めたら、要は人間の作ってきたものってほとんどが複製物だなと思って。そのときにコンセプトが生まれ始めてきました。例えば、今持っているマイクとかテーブルも2つありますが、何かしら型があって、こういう製品を大量に作っている。

おか 大量生産ですね。

松田 それとは別に、アートという部分がオリジナリティーという神聖化されたもので、例えば僕らが顔や姿が違うように、基本的に自然に生まれたものは一つ一つが違う。多分アートにも似たところがあって、そういう部分を僕は大事にしています。

おか なるほど。

松田 なので複製物だけを使って何かできないかなと思ったんですよね。それは版画もそうですけど、版を通してイメージを刷ったりとか。3D グラフィックスとかVRとかも使うんですけど、もともとアートのために生まれた技術ではない。

おか ないですね。

松田 そういうメディアアートというわけじゃないですけど、テクノロジーとか技術を使って複製した何かをしようというのがコンセプトのきっかけでしたね。

おか 現在の作品のきっかけがこの版という。

松田 そうですね。イメージを大量に生産しようとする。アートとは真逆の動きだと思うんですね。

おか ちょうどお聞きしようと思ったのですが、ウォー

ホルがお好きだと思うんですが、その影響はありますか。

松田 ウォーホルが、マリリン・モンローとかトマトスープレックスをアートにした、アートの概念を変えた人だとは思っているので、強く影響を受けていると思いますね。

おか 先ほどメディアアートという話がちらっと出ましたが、どんどんイメージが変わっていくのかなという気がしましたが、いかがですか？

松田 例えばスマートフォンとかそうですけど、元々ガラケーだったのがスマホになったみたいな話で、いくらテクノロジーが進化しても、多分僕の考えていることは変わらないというか。イメージを通して、結局その技術を通して、それとはまた逆行して振り返る、人間の歴史を振り返って行く。そういう部分はきっと変わらないと思います。

おか そのためにこれがあるということですね。

松田 そうです。だから、本当に人間が生み出してきた負の遺産でもないですけど、欲望のまま、その欲望を使ってアートをというか。アートは、人間の証明だと思っているんです。これが人間だよみたいな。そういうことをしたいなと思っています。

おか 松田さんは雰囲気クールなので、そういうイメージの方かなと思っていたのですが、今お話を聞いてすごく人間的な部分が感じられました。ありがとうございました。それでは三木さんのターニングポイントをお聞かせください。

三木 「自由」です。学部時代に自由課題を出されたんですね。それまでは、デッサンだったりとかモチーフに従って描くような風景画であったりとか、自分の意志で描くことはなかったんです。



でも、3年生の時に自由課題で「好きに描いてください。」と先生から言われたのですが、私は今までずっとモチーフの奴隷だったので。好きにやれと言われて、困ったんです。周りは個性を持っている方が多くて、困っているのは私だけでした。

おか 三木さんだけがどうしようという状況なんですね。全く進まなかった？

三木 ずっとエスキースの状態で。周りからもとりあえず好きなもの描こうって言われました。

おか 好きなものをまずは描かないとしようがないですね。どうしたんですか？

三木 それで悪い浮かべたのが子どもだったんです。おか なぜ子どもに辿り着いたのですか？

三木 昔から公園で遊んでいる子どもたちと一緒に遊ぶことをよくしていたんです。砂遊びしたりブランコに乗ったり。それがすごく楽しくて一番思い出に残っていたので、子どもが悪い浮かびました。

おか その時に自由を感じたわけですか？

三木 それも自由の一つですが、もう一つ理由があります。先ほどモチーフの奴隷だったと言いましたが、子どもというモチーフを見つけたことでやっと解放された。そこからは、どこまで許されるんだろうという気持ち、沸々と湧いてきまして。洋画専攻なのに黒板画を描いてみたりとか。先生は驚いていました。

おか その黒板画の作品も出発点は自由から？

三木 自由からです。

おか なぜそこに結びついたんですか？

三木 芸能人が技術を競い合うという内容で黒板アートを扱ったテレビ番組が放送されていて。それを観たことがきっかけです。

おか やってみると自由を感じましたか？

三木 ものすごく楽しかったですね。

アトリエにあるもの

おか ありがとうございます。次は皆さんの制作場所、アトリエに置いているものをご紹介いただきたいと思います。それでは北村さんお願いします。

北村 「虫眼鏡」です。
おか これはやっぱり細かいものを見るためでしょうか。物理学と何か関係があるんですか？

北村 そうですね。制作にも絶対使っているんですけど、その他にも身の回りのものとかいろいろものを見ています。全体を俯瞰して見ているときと、虫眼鏡で一部分を見ているときと、全然見え方が違うので、新しい発見になって制作にも繋がります。

おか どういうものを見ると面白いですか？

北村 駅の地面とか面白いですね。
おか 何か言われたりしませんか？

北村 言われないですね。何をしているんだろう？という感じで見られたりはしますけど。

おか 面白い地面の駅とかありますか？

北村 京都駅は面白いです。どこ見ても結構違うの。
おか 京都駅のホームとか改札構内とかが全部違う？

北村 全然違います。もう足跡とかも見たりして。
おか どれぐらいの時間やっているんですか？

北村 私はもう生活の一部ですね。通学する途中とかに見ています。

おか これが作品に影響していくわけですか？

北村 直接的に影響しますね。
おか 今回の作品も、虫眼鏡は関係しているんですか？
北村 切り絵は、1枚がA4ぐらいのサイズのを何枚か重ねているんですけど、その1枚を外に持って置いてみるんです。切り絵単体で見たときと、そのまま見たときの見え方の違いを、実験的に見てみて、展示空間に置いてみたらどうなるか、シミュレーションしています。

おか 虫眼鏡で見ると、また新しい発見が生まれるということなんですね。

北村 そうですね。自分の目では見えない部分なので。
おか ありがとうございます。齊藤さんお願いします。

齊藤 私は「カメラ」です。10年前とか20年前のデジカメですね。昔のデジカメを集めるのが好きです。

おか 良いですね、昔のデジカメって味があって。
齊藤 デジカメの機種によって色合いが違うんですね、白っぽく見えたり、紫っぽく見えたり。

おか 色合いというのは、覗いた時の色合いですか？
齊藤 写した時の色合いですね。なので、作品によってカメラも変えていたりします。

おか それはどういう使い分けをしているんですか？

齊藤 過去をモチーフにするようなとき、淡い優しい色合いにしたいなと思ったら、紫がかった写真になるカメラを使ったりします。もう一つが白っぽく写るカメラなので、現在を写すような、明るいイメージの写真にしたときに使います。解像度が低いことも好きで、過去って鮮明に見えるものじゃなくて、少しぼやけたような、見えないけど見える。そういうことを表現することに適しているなと思っています。

おか それは、作品制作する上で必要だということですか？普段何気なく写真を撮るときとはまた違う？

齊藤 どうでしょう。最近ではアーカイブすることを目標にしています。生活の中でも写真をたくさん撮ろうと思っています。私、1日1日をその日で過ごしてしまっ

て。未来のことは考えないことが多いんですよ。
おか その日を精一杯生きることですね。

齊藤 そうです。就活も、卒業した後に始めて、入社したのが5月とかで。

おか 何をされていたんですか、その間は。

齊藤 制作とか本を読んだりとか映画ばかり観ていたので、自分のことをちゃんと記録して撮っていかないと未来に繋がらないというか。

おか ありがとうございます、齊藤さんでした。続いて陳琪さんよろしくをお願いします。先ほど言っていた本ですね。

陳 そうですね。

おか これは「イラストで楽しむ世界の作家とキーワード」と書かれていますね。

陳 私は編入生として3回生から編入して、そのときにこの本を買いました。ちょうどそのとき、いきなり自由課題で何かを作ってくださいと言われました。

おか 三木さんと一緒にですね。

陳 そうです。何を作るのか、ずっと悩んでいたそのときに先生からこの本を紹介していただきました。

おか 本の内容は、現代アート作家の紹介であったり、



用語説明、パブリックアート、インスタレーション、アートプロジェクト。こういうことが載っていますね。これを制作の参考にしたということですね。この本を読んでいたんですか？

陳 いろいろな作家の作品を知ることができました。
おか それまでは、いろいろなアーティストの作品を調べたりすることはなかったですか？

陳 なかったです。

おか この本を読んで、興味を持ってアーティストを調べるようになったということですね。ちなみにどのアーティストがお好きですか？

陳 一番好きなのが、デュシャンです。

おか 現代美術の父ですね。この本で現代美術を理解されていったんですね。ありがとうございました。それでは野村さんお願いします。

野村 「ガスバーナー」です。

おか これは作品制作のときに使うものですか？

野村 今回の蠟の作品でも、蠟を全部掛けた後に、ディティールを滑らかにするために、これで炙ったりとか、蠟を扱っていない作品でも、木彫を制作してそれを炭化させるために使っていました。

おか 蠟を使うようになったのは、いつ頃からですか？

野村 私も課題の話になりますが、身体表現の授業が3年生の時にあり、パフォーマンスの課題が与えられました。その時に仏教の花祭りというお祭りの中で、甘茶をお釈迦さんの小さな像に掛けるという行為がありまして、それを彫刻化しようということで、自分が制作したお釈迦さんの像に甘茶に見立てた蜜蠟を掛けて固まる様子を見せるパフォーマンスを行ったことがありまして。

その時に液体からすぐに固形に変化する素材を探して蠟に辿り着きました。

おか 先輩方で蠟を使って作品制作されている方はいらっしゃるなかったですか？

野村 自分の先輩では、ちょっと心当たりはないですね。

おか じゃあ、周りにもいなかった？

野村 そうですね、大学でも扱ってなかったですね。以前は、金属の鋳込みの時に蠟を使っていたらしいんですけど、その蠟が余っていたので、それをいただいて使い切りました。

おか どのぐらいの量があったんですか？

野村 どのぐらいですかね。大きな鍋 3 つ分ぐらいありました。大学に残っていたのは蜜蝋、自然由来の赤茶色の甘い感じのイメージの色だったんですけど。それを使い切って今は白色のものを使っています。

おか ガスパナーは、こういった制作をするときに結構な頻度で使うわけですよね？

野村 そうですね。

おか あっという間になくなりませんか？

野村 だからあまり火力が必要ないときはガスを絞って使います。

おか 蠟も経費がかかってきそうですが、これからもそういう作品を作っていくんですか？

野村 そうですね。素材が変化していく様子に惹かれているので、これからも使い続けるような気がします。

おか これからも頑張ってください。ありがとうございました。それでは松田さんお願いします。

松田 「シルクスクリーンの版」です。

おか これは先ほども少しお話ありましたが、こういう

ものを普段使って制作されている？

松田 そうですね。これにインクを垂らして、ゴムのスキージで刷ります。白くなっている部分は穴が開いていて、そこからインクが落ちていくという感じですね。

おか シルクスクリーンのことはあまり分からないのですが、穴は自分で開けるんですか？

松田 感光台（製版焼き付け器）という機械があって、その機械のガラス面から紫外線が出て、光の当たった部分の感光剤が固まります。逆に光の当たらなかった部分は固まらないので、その部分を洗い流して穴を開けるような感じです。

おか 手間のかかりそうな作業ですね。

松田 そうですね。機械で大体 1、2 分光らせて、固めて、その後水洗いして。

おか 作業はそれだけじゃないですよ。

松田 そうです、元の網点のデータを作らなきゃいけないです。

おか 刷り上がるまでは結構時間がかかるんですか？

松田 どうでしょう。絵を描く人も速い人とか遅い人とかいるように人それぞれだと思いますが、自分の場合は、結構速いと思います。自分は 4 色刷りなので、黄、赤、青、黒で刷るんですけど、工程が多いです。ですけど、やっぱり人間が作ってきた技術なので、効率化というか最適化はされていて。自分も機械になっているような感覚があります。半自動というか。

おか これって、一度作ったら、もうこの版でしか使えないんですか？大量に必要な？

松田 なので、版を落とします。

おか 落とす？全部落とすんですか？

松田 はい。全部取ります。結構頑張って洗わなきゃいけないんですけど。

おか 使い回していくってことですか？

松田 そうです。固まったインクを全部落とす溶剤がありまして、それを頑張ってゴシゴシと。

おか 知らなかったです。毎回新しい枠を使っているのかなと思っていました。

松田 そうなるともうお金が…みたいな感じですね。自分で買ったりもしますが、僕の場合だと、同じ版を 2



枚複製しないので 4 枚の枠を使っては洗ってを繰り返して 1 枚 1 枚洗っています。

おか なるほど。勉強になりました。ありがとうございました。

松田 ありがとうございました。

おか それでは最後に三木さん。よろしくお願いします。

三木 先ほどの話でショッピングモールに出かけた際は、子どもの仕草などを観察してメモ帳に記録していると話したんですが。そのメモの内容を見ていただいてもいいですか。

おか 「シールを頭に貼る。走り回る。大声で叫ぶ。」

三木 「グーで箸を持つ。皿に顔を近づける。」、このグーで箸を持つというのは、子どもは握り込んで持つんですね。さらに、食べるときには顔をお皿に近づけて傾けて食べているんです。

おか 想像できますね。そういう様子を観察して、作品にいつも繋げているんですね。

三木 あとはマイルールもありますね。子ども独特のこだわりです。例えば小学生であれば、白線の上をはみ出さずに歩くみたいな。あれもマイルールですよ。

おか 「親よりさきさき歩く。4 歳児でも指をくわえる。迷子になると大声で母親を呼ぶ。」

三木 ババじゃなくて、ママなんですよ。

おか 「お気に入りのおもちゃと一緒に出かけ。友達とおもちゃを開封したとき、相手のおもちゃと交換して欲しくなる。」

三木 これは私もそうだったんですけど。

おか 「どこにいても走り回る」、その通りですね。

三木 そうなんです。

おか こういうことをずっとメモしているんですね。

三木 すっとメモしています。

おか その仕草とかを作品に取り込んでいくと思います。が、男の子はモデルになった子どもに近いイメージになるんですか？

三木 観察した記憶で描いています。

おか 女の子は三木さん自身ということなんですね。

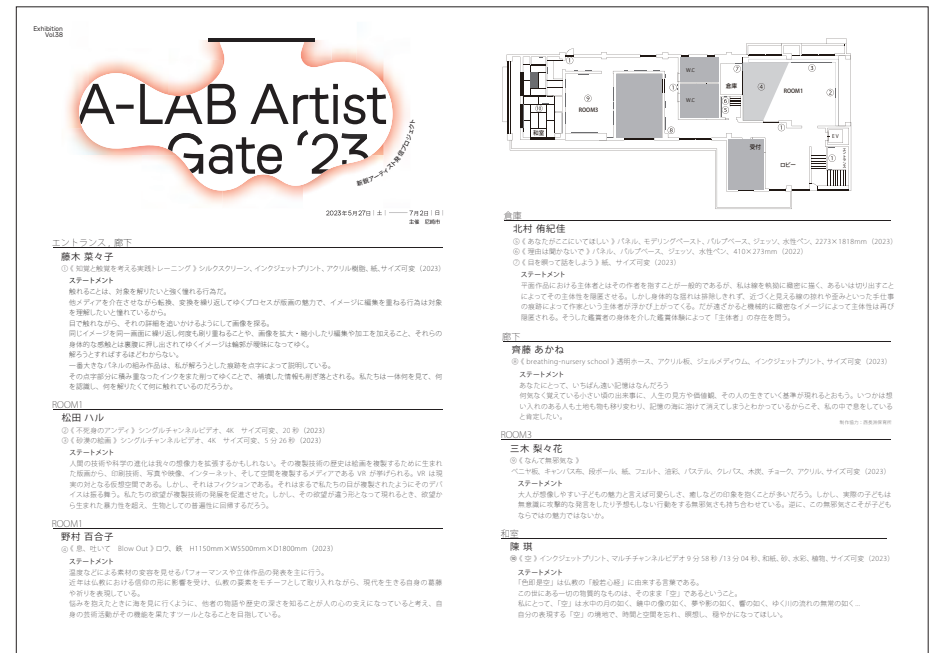
三木 そうなんです、はい。

おか 自分自身が頭にシールを貼るとかを想像して、描いていくわけですか？

三木 実際に観察した子どもは男の子の作品のように記憶を頼りに描いていますね。

おか ありがとうございました。アトリエにあるものと言うと数々あると思いますが、それぞれの作品に直結している部分があって面白いですね。非常に勉強になりました。ありがとうございました。





A-LAB Archive vol.40

Exhibition Vol.38

「A-LAB Artist Gate'23」

2023(令和5)年 5月27日(土) - 7月2日(日)

2024(令和6)年 3月 初版第1刷発行

【発行】

尼崎市 文化振興課

【フライヤーデザイン】

Studio Spass

【撮影】

小林哲朗(P1-14)

A
LAB

問い合わせ先:

尼崎市 文化振興課

TEL: 06-6489-6385

FAX: 06-6489-6702

E-mail: amalove.a.lab@gmail.com

 @alab_amalove

 @amalove.a.lab

www.ama-a-lab.com

